

第5章

ヒンドゥー教寺院の非対称伽藍と

仏教寺院の対称伽藍

はじめに

本論第1章において筆者は、祠堂群の「ずらし」を伴うヒンドゥー教の遺構例の内、中・東部ジャワに現存するものを網羅した上で、その伽藍構成の特質について分析を行った。そこで明らかになった事実の内、まず特筆されるべき点は、このような祠堂群の「ずらし」の背後に、聖別された寺院敷地の中心点を避ける意図が明瞭に窺われることである。逆にいえば、寺院敷地の中心点を避けることを目的として祠堂群がずらされていると考えられる訳で、その意味で「ずらし」は施工時に偶発的に生み出されたものではなく、意図的に行われたものと見るのは妥当な解釈であろう。

このような祠堂群の「ずらし」の問題は、早くも今世紀の前半には研究者の注意を引き、その後もオランダやインドネシアなどの学者達によって折に触れて言及されてきているものであったが、とりわけこの問題に強い関心を寄せたのはインドネシアのスクモノ氏である。しかしその彼にしても、上記の祠堂群の「ずらし」が全てのチャンディにあまねく認められる現象か否かという問題の検討は、未だ手が付けられていないと指摘するに留まっている。スクモノが「全てのチャンディ」という時に意味する範疇は、実はヒンドゥー教寺院のみならず仏教の寺院をも含んでいる⁽¹⁾。周知のように中部ジャワの南部では、時期を前後して、あるいはほぼ同時期に建立されたともいわれるヒンドゥー教及び仏教の両寺院が、相接するように併存している⁽²⁾。

これに関連してデュマルセ氏は、上に述べた非対称伽藍が、ヒンドゥー教寺院だけではなく、仏教寺院にも適用されていると、ほぼ断言に近い形で指摘している⁽³⁾。しかしながらその見解を裏付ける具体的な根拠が示されていない限り、あらためて各事例の考察を行う必要があるだろう。また一方でアノム氏も、「中心を避ける」という発想自体が、ヒンドゥー教及び仏教の遺構に共通したものであると指摘しているが⁽⁴⁾、それに対し筆者はやや異なる見方を有しており、この点については後にあらためて検証を加えることにしたい。

既に指摘されているように、両宗教の寺院を構成する各祠堂は、その平・立・断面の構成や材料、構法などの面で典型的であるだけでなく、装飾的彫刻に至っては共通のモチーフが随所に用いられるなど、全般的な造形表現が示す傾向は、ほぼ同一の類型を示しているといえる⁽⁵⁾。それでは、それらの祠堂が一群となって構成される伽藍全体の構成についても、やはり両宗教のチャンディは共通の類型を示すといえるのだろうか。それとも宗教の別に応じて異なる様相を呈するのであろうか。

以上の問題点を踏まえつつ、本章では、まず中部ジャワ南部における両宗教のチャンディに関して、伽藍の対称性という観点からの比較検討を試みることにする。そしてそこで導き出された相違する点については、伽藍に投影された宗教的觀念の相違という側面からの検証を行う。

第1節 ヒンドゥー教寺院の左右非対称伽藍

非対称伽藍の詳細については第1章で既に述べたところであるが、重要なポイントとなる点についてのみ、ここで再確認しておくことにしたい。まず、これまで取り上げてきた非対称伽藍は、中部ジャワ南部の主要なヒンドゥー教寺院の殆どがそれを基本とするものであり、さらに東部ジャワ期のチャンディにも連綿と継承されるほどの、強い拘束力を持った配置型式である。

ほぼ正方形の囲繞壁で取り囲まれた敷地内に、西(ないし東)面するシヴァ神を祀る主祠堂が配置され、それに正対して三基の副祠堂を配するパターンが基本となる。四基の祠堂は東西に走る中軸線を持ち左右対称に配置されるが、それらは囲繞壁で囲まれた敷地の中軸線上にはなく、全体に北側へずらされる傾向が認められる。また囲繞壁の正面開口部は、やはり敷地の中軸線上には置かれずに、これは逆に南側へずらされる事例が多い。

そして寺院敷地の中心点には、リング状の立石などを配する事例も認められ、またその地点は、主祠堂の正面突出部と基壇の交差する隅の部分に一致する。敷地の中心点に、十文字線の刻印された特殊な切石を置いていたことが確認される事例も有る。それは敷地中心点を聖別する意図の下に配せられた指標物と見られ、その地点を避けるべく祠堂群全体が北側にずらされているものと推察される。このように敷地中心点に指標物を配し、またその地点を主祠堂前面の隅部に一致させることが規範になっていると見られることから、祠堂群の「ずらし」は恣意的なものではなく、意図的・計画的に行われたものであると考えられることは既に述べた通りである。

また一方で、壁から等距離離れて正方形を成すライン上には、やはり何らかの指標物が、一辺につき三個ずつ、計八個配置されている事例が多い。そこに八個のリング状の立石を配する事例も認められる。こうした伽藍は非対称になるとはいえ、それは左右対称を基本とした上での、わずかな祠堂群の偏向であることには留意が必要である。左右対称に配置された祠堂群が、敷地の中心から若干北側へ偏することによって微妙に非対称な伽藍を造っている。ただし、ここで仮に祠堂群を取り除いて見るならば、残されるのは囲繞壁及び九つの指標物であるが、それらは全体に四方対称の配置をなすとも見ることが出来る。つまり寺院伽藍は微妙に左右非対称となる反面、中心から八方へと広がりを見せる空間構成を同時に内包しているともいえるだろう（図43）。

ところで、寺院敷地の中心点及び四方四維に位置する地点に置かれた九つの指標物であるが、これらが寺院建設のどの段階で、いかなる象徴的意味をもって設置されたのかを知る手だては極めて乏しい。わずかな手がかりを辿って見るならば、ジャワの古代刻文の大半を占めるシーマ定立文書の幾例かに、シーマとされる区域を鎮める種々の儀礼に伴って、土地を区画・結界する指標物の置かれることが記されており、またそれが場合に依じてリングの形状をとると見られることが一つの示唆を与えてくれるように思う⁶⁾。既に見てきたように、サンビサリの聖域を結界する指標物は、やはりリング状の立石である。つまり寺院敷地に配せられた九つの指標物も、何らかの地鎮祭儀礼に基づき配置されたものであり、それを下敷きにして祠堂群が建立された可能性が考えられるのである。

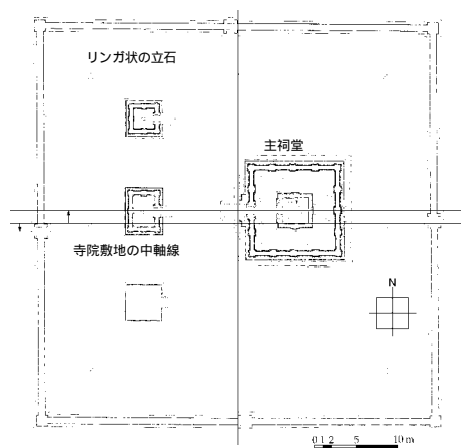


図43 チャンディ・サンビサリ 配置図

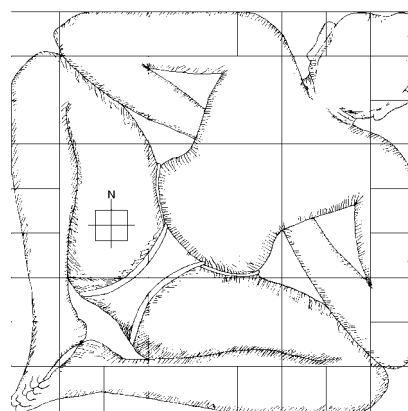


図44 西インドの建築職人が描いたとされるヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの略スケッチ

そしてこのことから思い起こされるのが、インドのヴァーストゥ・プルシャ・マンダラと呼ばれる観念である。インド中世から伝わるヒンドゥーの建築書には、寺院などの建立に先立って、その建設予定地の上に、ヴァーストゥ・プルシャと呼ばれる土地の精霊を模した人体と、内部を格子状に分割したグリッドとを重ねて描き、その図形の上で地鎮祭を行うことが記されている。グリッドのそれぞれの区画には種々の神々が勧請されてマンダラをなし、特にその中央の区画には、宇宙の根本実在の象徴であるブラフマー神が座を占めている。図形上の特定の箇所は、ヴァーストゥ・プルシャの身体の脆弱な部分と対応して土地の急所と見なされ、その部分上に柱

や建物の一部などを配することが禁止される場合がある。その土地の急所の内、最も十分な注意をもって避けられるべき箇所は、図形の中心点を含む中央区画の内外の地点だとされる。ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを用いた設計が寺院の伽藍配置に適用される場合には、寺院敷地の中心点を含む各地点が、避けるべき土地の重要な急所として認識されることになる（図44）。

つまり、先に述べたジャワのヒンドゥー教寺院の伽藍配置に認められる祠堂群の「ずらし」は、このマンダラにおける土地の急所、なにかんづく寺院敷地の中心点を避けるという発想を具現化したものではないかというのが、筆者を含めた幾人かの研究者の共通見解である。

インドのヒンドゥー教寺院の建築空間の象徴的意味を考える場合に、極めて重要な上記のマンダラの観念が、そのままの形ではないにしても、中心を避けるという意図的な「ずらし」の慣行を伴って、海を越えてジャワ島へ流布し、何らかの影響を及ぼしている可能性は、少なくとも否定されるべきではないであろう。

第2節 ポロブドゥールの四方対称伽藍

以上の議論を念頭に置きながら、次はジャワの仏教チャンディの伽藍構成について、豊富な既往研究をも視野に入れつつ見ていくことにしたい。中部ジャワの仏教遺跡に関しては、ポロブドゥールなどの大規模遺構が大きくクローズアップされてきた経緯もあって、中部ジャワの諸遺構の大部分を占めるかのような印象もあるが、遺跡の絶対数からいえばヒンドゥーのものよりも少なく、現存遺構の所在地も中部ジャワの南部に限られている。そして遺跡によっては荒廃の度合いが著しく、また囲繞壁などが地中に埋没している事例もあることから、伽藍構成の分析に堪えるだけの遺構の数は決して多いとはいえない。こうした制約もあって、以下に例示する仏教チャンディはわずか四例に留まるが、それらは当時の仏教思想を如実に具現化した寺院として、ヒンドゥー教寺院の非対称伽藍との対比を論及する上で好個の事例といえる。

先ず最初に取り上げるのは、現存する仏教系の遺構として、クドゥ南部地域で最大の規模を誇るポロブドゥールである。ポロブドゥールについては、これまでに膨大な既往研究があり、その詳細について本章では割愛するが、その尊像配置にみる特徴と当時の仏教思想との関連についてのみ、以下に概説を試みることにしたい。

概ね八世紀の後半頃から九世紀の中頃までにかけて、シャイレンドラ王朝によって建立されたといわれるポロブドゥールの建築構成は、一辺およそ120mの正方形の基壇の上に五層の方壇を段台状に積み、さらにその上に三層の円壇と、鐘形の中心ストゥーパを戴いたものとなっている（図45）。祠堂が大半を占めるジャワのチャンディの建築構成が、宗教の別を問わず、基本的には左右対称を旨とするものであるのに対し、ポロブドゥールの造形は完全なる四方対称の構成をなし、その意味でも極めて例外的な事例といえる。

最上部の中心ストゥーパを取り囲むように、上部三層の円壇には72体の転法輪印如来の像を容れた小ストゥーパが配置され、また第四回廊主壁上部の仏龕内には、総計64体の説法印を結ぶ如来像が配置されている。さらにその下の基壇及び第一～三回廊の主壁上部に設けられた仏龕の中には、東側に触地印如来が東面して座し、また南側に南面する与願印如来、西側に西面する定印如来、そして北側に北面する施無畏印如来の像が、各側に92体ずつ配せられている。これら六種の印相をとる如来像の内、基壇及び第一～三回廊の主壁上部の仏龕内に安置された四仏には、金剛界系として定着した四方仏、すなわち阿閼仏（東側）、宝生仏（南側）、阿弥陀仏（西側）、そして不空成就仏（北側）の印相及び配置が取り入れられていると考えられている⁷⁾。

しかしポロブドゥールの場合、上記の四尊が金剛界の四仏に同定され得るとしても、第四回廊主壁上部の説法印如来、さらには円壇上の転法輪印如来像の尊名比定については様々な議論がなされている。たとえば、ジャワやバリの仏典の記述に基づき、説法印如来を毘留遮那、また転法

輪印如来を釈迦牟尼に比定する説⁽⁸⁾がある他、ボロブドゥール全体の尊像構成の典拠を『真実撰経』の記述に求め、その上で両如来の尊名比定を試みる論説⁽⁹⁾も展開されている。

この他にも、ボロブドゥールの中尊如来の比定には様々な見方があるのだが⁽¹⁰⁾、いずれにしても中心的な尊格の四方に金剛界の四方仏を配する図像的な構想が根底にあると想定される。しかしボロブドゥールの場合、数次にわたる設計変更が行われた後に、現状の建築が確立されたと見られることには留意が必要である⁽¹¹⁾。つまりボロブドゥール造営の各段階で、建築に込められた宗教的な意味が折々に異なっていたことも考えられ、そうした紆余曲折を経た後に、現状の姿形に落ち着いた可能性を否定することは出来ない⁽¹²⁾。四方四仏の尊像構成にしても、必ずしもボロブドゥールの造営が着手された段階で既に意図されていたものとは限らない。しかし結果として見れば、ボロブドゥールにおける四方対称の建築構成は、四方四仏の尊像構成を立体的に視覚化する上で、極めて適したものであるといえるだろう⁽¹³⁾。

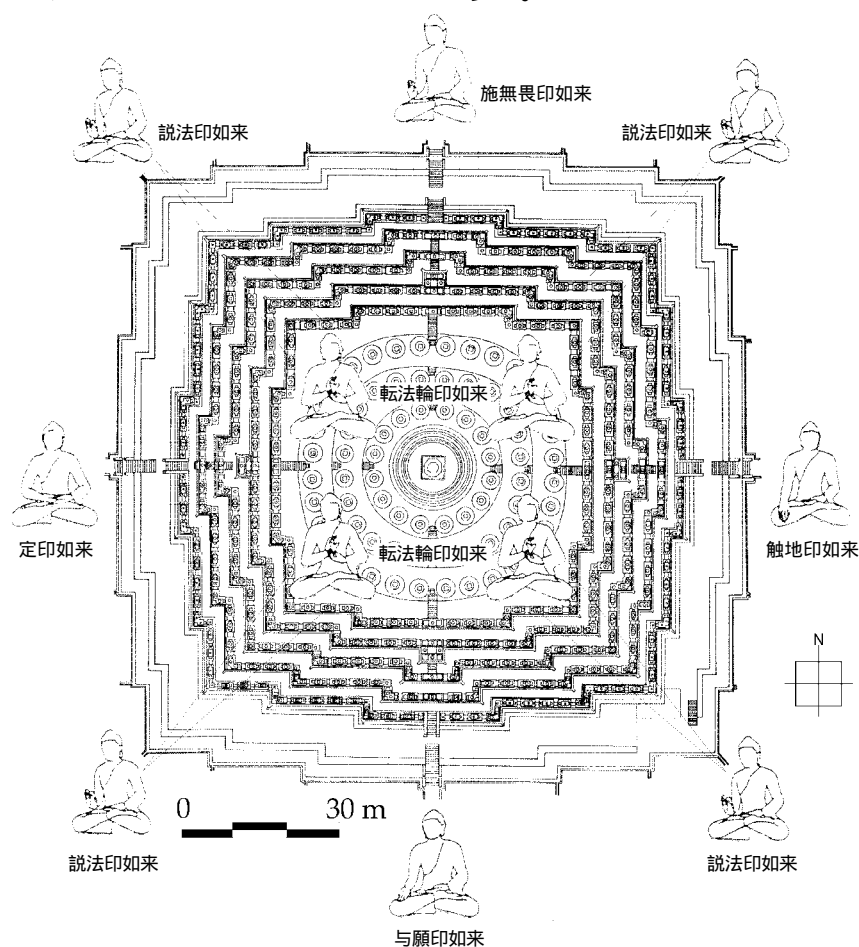


図45 ボロブドゥール 配置図

第3節 チャンディ・セウの四方対称的伽藍

続いて、プランバナン地域で最大の規模を誇るチャンディ・セウの伽藍を見ることにしたい。伽藍の中央には、十字形平面を有する主祠堂が東面して建ち、またそれを取り囲むように、計240基のチャンディ・プルワラと称する小祠堂群が配置されている。プルワラの第二及び第三列の間には、四方に一对ずつ、計八基と見られるチャンディ・アピットと呼ばれる祠堂が配置されている⁽¹⁴⁾。寺苑は矩形をなし、ほぼ左右対称をなすが、主祠堂から四方へ展開される祠堂群全体の配置は、四方対称的な構成を有するといえる⁽¹⁵⁾ (図46)。

セウの創建年代の詳細は明らかではないが、寺苑の内外から発見された刻文を基に大まかな推定は可能である。まず、その寺苑の南西側のチャンディ・プルワラの階段脇で発見されたマンジュシュリー・グリハ刻文⁽¹⁶⁾に、「文殊師利の住処」と称する祠堂が792年に「増拡」(? mawṛddhi)されたことが記されているが、これをセウの主祠堂に比定する説が有力である⁽¹⁷⁾。続いて、セウの南方およそ300mのところに位置するチャンディ・ルンブンの近傍から発見された782年の銘を有するクルラク刻文⁽¹⁸⁾に、これも文殊師利の像が奉献されたという寺院についての記述があり、それを先の碑文と併せ見た上で、同じくセウに比定する説がある⁽¹⁹⁾。これらの説によるならば、少なくとも782～792年の間、主祠堂に祀られた本尊は文殊師利であったと推察されるが、残念ながら本尊像は現存せず、確たることは判らない。しかしながら、およそ782年頃までに、セウが寺院として体をなしていたと見れば、その建立が着手された時期は、概ね九世紀の第三四半期頃ということになるであろう⁽²⁰⁾。

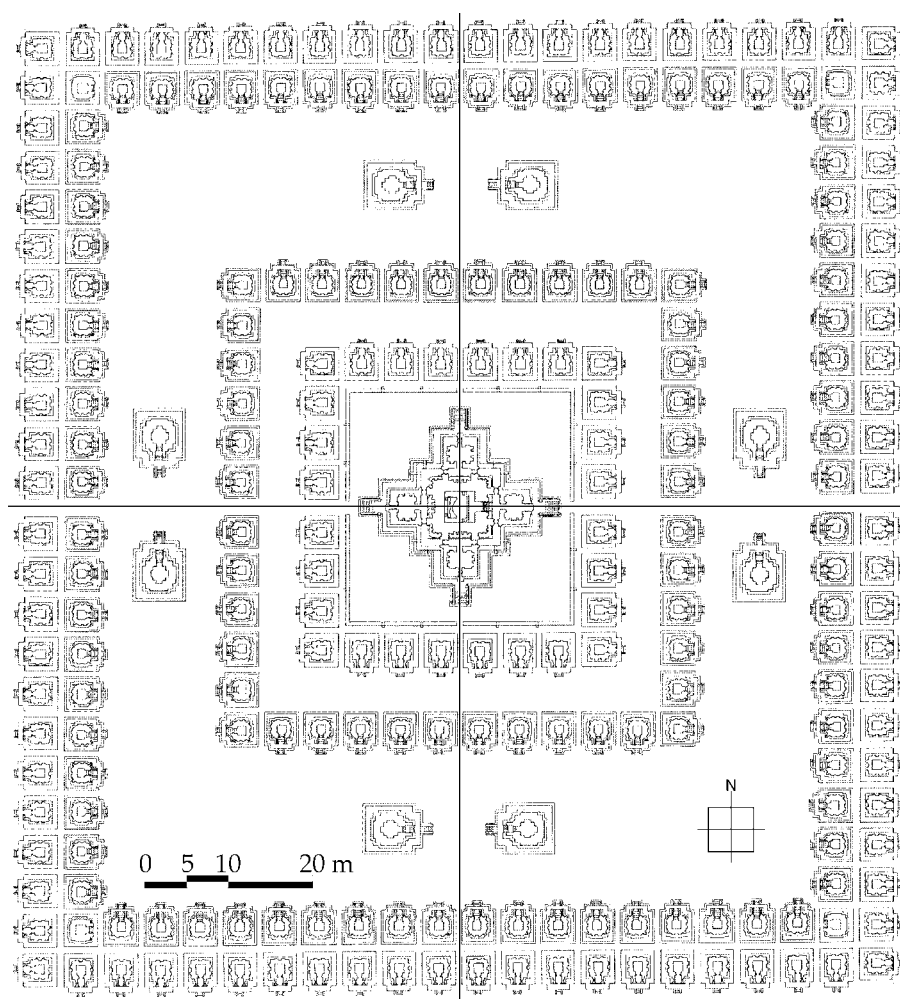


図46 チャンディ・セウ 配置図

先のマンジュシュリー・グリハ刻文の「文殊師利の住所」をセウの主祠堂に比定するならば、刻文のいう mawṛddhi とは何を意味するのであろうか？ mawṛddhi の原義は、「増える」、「繁栄する」などであるが⁽²¹⁾、それを意識して「増拡」と捉えることは可能である。そしてそのことを裏付けるかのように、主祠堂の解体修理が行われた際に、その基壇の内部中央から、煉瓦積み層の上部に切石積み層を載せて造られたほぼ直方体からなる構造物が発見されている⁽²²⁾。その直方体の構造物を、現存する主祠堂に内蔵された前身の建造物の一部と見る学者は少なくない⁽²³⁾。つまりその前身建造物が、文字どおり「増拡」されて出来たのが、現在の主祠堂という訳である。

しかし一方でデュマルセは、主祠堂に残された改変の痕跡を精査した上で、上記の説とは異なる解釈を提示している。まず、主祠堂の規模自体に大きな変化がなかったことを前提に、当初の建築は中心内陣にのみ扉を有する極めて開放的なものであったとして、それが回廊を遮断する扉を新たに設け、また四方の各房の開口部の大きさを微調整するなどの改変を通じて、主房及びその四方の房との空間的な連続性がより緊密になったと論じている⁽²⁴⁾。その結果として、中心内陣及び身舎側壁の龕に安置された尊像群と、四方の房に祀られた各尊像の有機的な関連性が強化され、またその尊像構成が全体として、金剛界曼荼羅の主要37尊の配置に類するものになったと、ボッシュ氏の説も引きながら推測している⁽²⁵⁾。そしてこの一連の改変が、マンジュシュリー・グリハ刻文に記された792年までに施されたと見た上で、先のmawṛddhiの意図するところは、新たに安置された尊像が既存のそれよりも大きいことによると解釈している⁽²⁶⁾。この792年までに行われたと推定される改変を、ひとまず造営の第二期と呼んでおきたい。

また一方でデュマルセは、上の改変と時を同じくして、プルワラ群に安置された尊像群も置き換えられた可能性について指摘している⁽²⁷⁾。チャンディ・セウの寺苑からは、これまでに少なくとも50体の仏像（46体の如来像と4体の菩薩像）の存在が確認されている。その大半を占める如来像については、いずれも頭部を欠くなど、大なり小なりの損傷を抱えているが、それらの尊像が結ぶ印相から尊名の比定が可能であり、またその全てがチャンディ・プルワラの堂内に安置されていたと考えられている⁽²⁸⁾。そしてここで極めて興味深い点は、プルワラの面する方位に応じて、それぞれ触地印如来（東面）、与願印如来（南面）、定印如来（西面）、そして施無畏印如来（北面）の配せられる傾向が認められる点である⁽²⁹⁾。いうまでもなくこれらの四如来に見る印相は、金剛界四仏のそれと一致するものであり、また先のポロブドゥールの尊像構成とも共通している⁽³⁰⁾。上述のデュマルセの指摘を踏まえた上で、プルワラの尊像が造営の第一期のものではない可能性を考慮したとしても、少なくとも第二期、すなわち八世紀末以来のものと見て良いであろう。

そして240基のプルワラ群であるが、これがセウの造営第一期に既に計画されていたものか、あるいは第二期に新たに増設されたものか、明確に判断できるだけの材料に乏しい。しかしいずれにしても、整然とした幾何学的秩序と均整に従って配置されるプルワラ群は、四方に四仏を配する当時の仏教思想の影響の下に、同時期に計画されたものである可能性が高い。

また一方で、主祠堂内に並び配せられていた各尊像については、現存するものが皆無であるために、諸説は推定の域を出ない。しかしながら、主祠堂に見る四方対称的な十字形平面は、やはり中尊の四方に四仏を配する図像的な構想に叶ったものであるといえる⁽³¹⁾。

以上の点を念頭におきつつ、あらためてセウの伽藍構成を見てみよう。主祠堂は伽藍のほぼ中央に位置し、中心内陣から四房を経て四方に展開される祠堂群の構成は、まさに中尊の四方を四仏で囲繞する構想を具現化したものとして映じる。ところがアノム氏は、伽藍の中央に主祠堂が配せられることを認めながらも、「・・・チャンディ・セウの設計者によって意図されたこの最も神聖なる（寺院敷地の中心）点の上には、一定して何もおかれていない。通常は中心内陣の中央に置かれる本尊像が、わずかに後方へずらされているのである」と述べている。寺院敷地の中心点の直上に主祠堂は配置されているが、本尊像はその上にないので、敷地中心点は避けられていると見なし得る、というのが氏の見解である。加えてアノム氏は、そのことを根拠の一つに挙げた上で、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの観念に基づく中央を避ける発想自体が、ヒンドゥー教寺院と通底するものであるとまで推断している⁽³²⁾。

この見解を吟味するにあたって、まず第一に、本尊像（ないしリンガ）を内陣の中央に安置する慣習は、ジャワではヒンドゥー教の寺院に限られることを指摘しておかなければならない。ジャワに現存する仏教寺院の場合、その本尊像は、内陣の奥に据え付けられた台座の上に安置されるのが定石である⁽³³⁾。従って、尊像が内陣の中央に置かれぬのは当然のことである。もっと

もセウの場合、中心内陣の広さに比して本尊像がかなり大きかったと推定され、相対的に尊像は内陣の中央に寄ることになる。しかしそのことをもって、本来内陣の中央に置かれるべき尊像が、「わずかに後方へずらされている」と見るのは幾分穿った解釈に思える。ジャワの仏教寺院の尊像安置の慣例に従って、内陣の奥に寄せて尊像が配置されていると見れば済むだけのことであり、そこに内陣の、ひいては敷地の中心点を避ける意図を敢えて読み取る必然性は感じられない⁽³⁴⁾。

第二に、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラとの関連を論じるならば、なぜヒンドゥーのマンダラが仏教の寺院に適用され得るのかという問題に対する説明が必要である。しかしアノム氏は、その問題には一切論及していない。

そして第三に触れておきたい重要な点は、セウの伽藍構成を観察する限り、先のヒンドゥー教寺院に見たような意図的な祠堂の「ずらし」は看取されないことである。寺院敷地の中心点の直上を建物の一部が覆うことのないよう、その地点を避けるべく主祠堂を南北方向にずらしている形跡など微塵も認められない。むしろセウの主祠堂は伽藍の中央に厳然と位置し、それを起点として四方に広がりを持つ空間を構成しているとするのが妥当であろう⁽³⁵⁾。そしてその四方対称的な伽藍こそが、これまでに繰り返し述べてきた、当時のジャワの仏教思想に基づくところの、中尊の四方に四仏を配する構想を忠実に具現化したものであると考えられるのである。

第4節 チャンディ・セウの類例としてのチャンディ・ルンブン

仏跡チャンディ・セウの南方およそ500m、またヒンドゥー教の三大神を祀るチャンディ・ロロ・ジョングランの北北東およそ500mの地点にあるのがチャンディ・ルンブンである。またルンブンとセウの間にはチャンディ・ブブラがあって、それらの三遺構がほぼ一直線上に配置されていることにより、相互に宗教的な関連性のあったことが予測される。セウ及びブブラと並んで、ルンブンもプランバナナ地域における仏教寺院グループに類別されるチャンディであるが、この遺跡の性格を決定付ける尊像は堂内に現存しない。

ほぼ正方形をなすルンブンの伽藍の中央には、十字形平面をなす主祠堂が東面して建ち、またその四方を取り囲むように、16基のチャンディ・プルワラが配置されている（図47）。デュマルセも指摘するように、プルワラ群は各々若干の改変を経ているようであるが、その配置自体は創建時からのものであると推測される⁽³⁶⁾。ほぼ左右対称に造られたその伽藍には、やはりヒンドゥー教の諸遺構に見るような祠堂の「ずらし」は認められない。伽藍の規模はセウに比べては

図47 チャンディ・ルンブン 配置図

るかに小さいが、十字形平面を有する主祠堂の四方にプルワラを配する全体の構成は、セウに類するものであるといえる。

第5節 チャンディ・ブラオサン・ロルの左右対称伽藍

チャンディ・ブラオサンもまた、中部ジャワを代表する仏教寺院であり、チャンディ・セウの東北東およそ1.5kmのところに位置している。寺苑は大きく南北の二つのグループに分かれ、その内、北側のものはチャンディ・ブラオサン・ロル、そして南側のものはチャンディ・ブラオサン・キドゥルと呼ばれている。後者は荒廃の度合いが著しく、現存遺構から正確な配置の様態を把握するのが困難であるため、本節ではチャンディ・ブラオサン・ロル、それも比較的残存状態が良好な主要部に限って話を進めることにしたい。

チャンディ・ブラオサンの明確な創建年代は不祥であるが、寺苑内外から発見された刻文の記述により、概ね825年頃から850年頃までの間に建立がなされたものと推定されている⁽³⁷⁾。その配置を見ると、まず二基の主祠堂が西面して建ち、それを置く内苑の周囲に囲繞壁が巡らされ、さらにそれを取り囲むように、58基のチャンディ・プルワラと116基の小ストゥーパが配置され、ほぼ左右対称の伽藍を構成している⁽³⁸⁾（図48）。この遺構にしても、第一次の創建時と現状の建築は大きく異なっていたようであり、例えば主祠堂Aは、それよりも古い建造物の上に建てられたことを示唆する痕跡が確認されている他、主祠堂の堂内の尊像群が新たに置き換えられた可能性も指摘されている。しかしながら、プルワラ及び小ストゥーパ群が整然とした幾何学的構成の下に配置されていることを考慮すれば、それらが同時期に計画されたと考えることに問題はなく、またデュマルセも指摘するように、上記の変更を想定したとしても、建築群の配置それ自体に大きな変化はなかったと推察される⁽³⁹⁾。

さて、二基の主祠堂の間には隔壁が設けられているが、その隔壁で両分された内苑の二つの領域のほぼ中央、若干東寄り（後方）に主祠堂は配置されている。先のヒンドゥー教寺院に見たような祠堂群の意図的な南北方向への偏向、すなわち敷地中心点の直上を避けて祠堂を配するような「ずらし」は、ここでもやはり看取されない。それと同時に、囲繞壁に設けられた開口部と主祠堂がほぼ同軸線上に配置されていることにも留意が必要である。既に指摘した通り、非対称の伽藍構成を有するヒンドゥー教寺院の場合、囲繞壁の開口部も敷地の中軸線上には置かれず、これは祠堂群とは逆に南側へずらされる傾向が認められる。チャンディ・ブラオサン・ロルに見る直進的な導線、つまり囲繞壁の開口部から主祠堂の入り口、そして本尊像へと一直線に進む導線で表現された建築の配置は、既述のヒンドゥー教寺院には確認されないものである。

そしてこのような左右対称伽藍は、先のチャンディ・セウと類する側面を持ちながらも、異なる尊像構成に従って造られている。まず、囲繞壁の外周を外向きに取り囲んで、一群のチャンディ・プルワラが配置されているが、東西南北の各方に面するプルワラの内、東面するものから六体の阿閼仏の像が、また南・西・北面するものから、各々一体の宝生仏、四体の阿弥陀仏、二体の不空成就の諸像が発見されている⁽⁴⁰⁾。これらの尊像の配列に関する限り、先のチャンディ・セウ並びにボロブドゥールとも共通している。

しかし一方で、ブラオサン・ロルの主祠堂の内陣に並び配せられた尊像群は、中尊の左右に脇侍を配する三尊形式に基づいて配置されていることが確認されている。主祠堂の室内は三室に分かれ、その各々に三尊像が安置され、三種の三尊形式が併祀されていると見られる⁽⁴¹⁾。このように三尊形式で表現された作例はブラオサン・ロルのみに留まらず、他にチャンディ・ムンドウットやチャンディ・ソジワンなどの重要な仏跡もそれにあたることから、それらの遺構に認められる三尊形式は、四方四仏の構成と並んで、往時の中部ジャワにおける重要な尊像構成をなしていたと考えられる⁽⁴²⁾。

そして見てきたようにプラオサン・ロルの全体の尊像構成は、四方四仏及び三尊形式の融合した形態をとるものと考えられるが、そのような諸尊の配置を建築を通じて具現化するにあたって、左右対称の伽藍構成は必要不可欠とまではいえないにしても、少なくともその目的に適合する配置形式であるといえる。

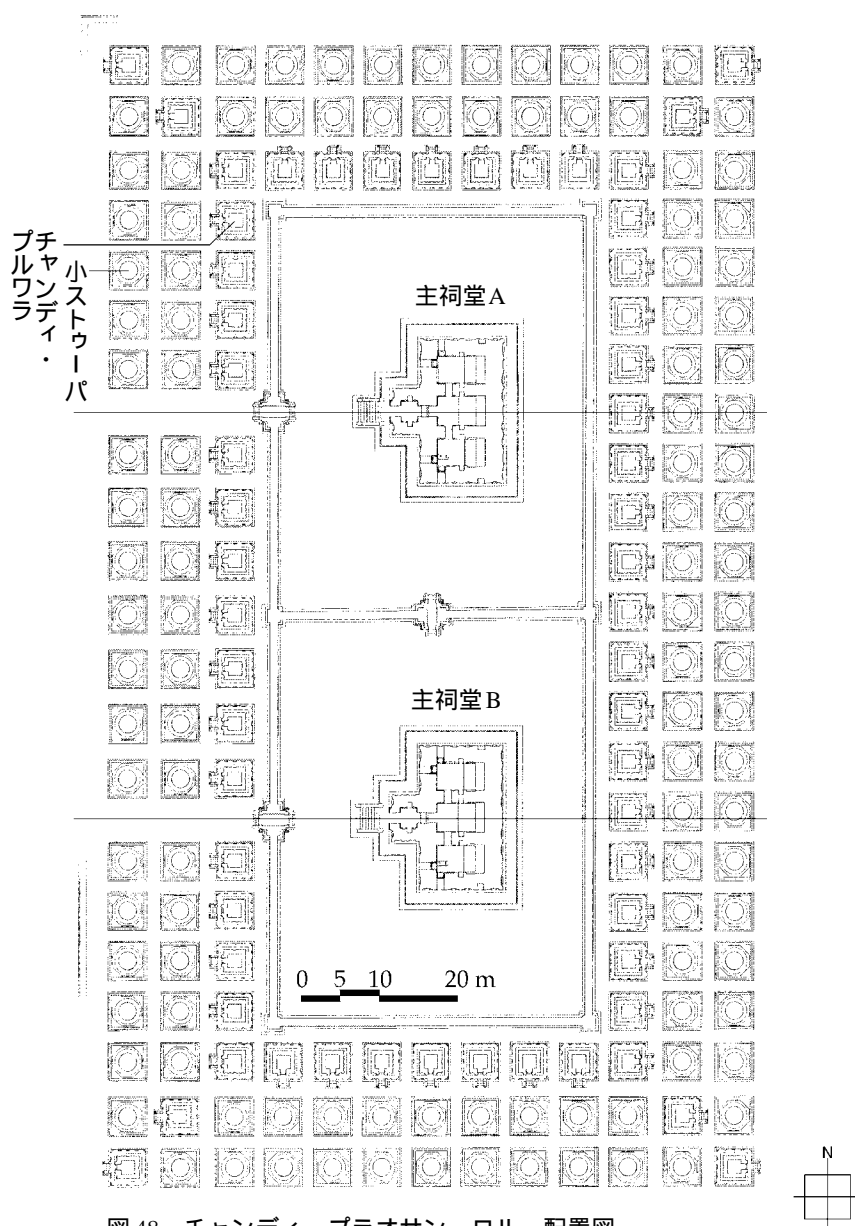


図48 チャンディ・プラオサン・ロル 配置図

第6節 小結

以上、中部ジャワの重要な仏教チャンディであるボロブドゥール、チャンディ・セウ、チャンディ・ルンブン、そしてチャンディ・プラオサン・ロルについて、伽藍の対称性という観点から考察を行った。完全に四方対称の構成をなすのはボロブドゥールのみであるが、セウの伽藍にしても、厳密に言えば左右対称ではあるものの、十字形平面をなす中央主祠堂を起点として四方に展開する祠堂群の配置は、四方対称的であるといえる。またルンブンの伽藍も、セウに類するものであると考えられる。そしてこうした四方対称ないし四方対称的な伽藍構成は、当時のジャワ仏教に係わる尊像の構成、とりわけ中尊の四方を金剛界四仏によって圍繞する構成に従って造られたと見られることも、既往の研究によりながら追認した。

一方、左右対称の伽藍をなすチャンディ・プラオサン・ロルは、ポロブドゥールやセウと同様に四方四仏の尊像構成を有する一方で、主祠堂の室内には三尊形式を基軸とする尊像群が安置されている。またその左右対称の伽藍は、このような尊像構成を具現化する上で、合目的的な配置形式と考えられることも併せて指摘した。

以上の四遺構の伽藍構成に関していうならば、左右の、あるいは四方の対称性が強く意識されていると見られる。少なくとも、ヒンドゥー教の諸寺院に認められるような、寺院敷地の中心点の直上を避けて祠堂群をずらす、あるいは中軸線を避けて開口部を設けるなどの、明確な意図性を窺わせる「ずらし」は看取されない。むしろ仏教遺構の対称的な伽藍は、ジャワにおける仏教の思想と、それに伴う尊格の構成原理と密接に関連するものであると考えられ、伽藍を左右ないし四方対称とすることには必然性を認め得る。

つまり裏を返せば、左右対称を基本としつつも、寺院敷地の中心点を避けるべく、祠堂群をずらして造られる非対称の伽藍は、ジャワにおいてはヒンドゥー教の諸遺構に固有の配置形式であると推察される。荒廃著しいジャワのチャンディの中にあつて、わずか四例ではあるが、極めて重要な仏教遺構の諸伽藍において、左右ないし四方の対称性が重んじられていることを考慮すれば、上記の見方は是認され得ると考える。そしてその見解は、筆者が前稿で追究した論点、すなわちヒンドゥー教の諸寺院における非対称の伽藍構成に、ヒンドゥーのマンダラの觀念が反映されているという解釈を、側面から傍証するものであるといえるだろう。

注記

- (1) Soekmono, R., *Candi: fungsi dan pengertiannya*, Ph.D. thesis Universitas Indonesia, Jakarta, 1974, p. 234
- (2) 対立関係にあったヒンドゥー教及び仏教を奉じる二つの王朝が、中部ジャワ南部の地で興隆と衰亡を交互に繰り返したとする歴史観を前提に、仏教王朝シャイレンドラが栄えたと言われる八世紀中頃から九世紀前半頃までにかけて、中部ジャワ南部では仏教チャンディのみの造営が行われたと見る解釈がある(Dumarçay, J., *Histoire de l'architecture de Java*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, [Mémoires Archéologiques 19], 1993, p. 287)。しかし一方で、八世紀の後半以後における仏教及びヒンドゥー教の王朝の対立・抗争的な関係を否定し、むしろ両者は共存・共栄の関係にあり、また両宗教のチャンディの建設時期にしても、場合によっては部分的に重なっていた可能性を指摘する論考も発表されている(Jordaan, Roy E. ed, *In praise of Prambanan: Dutch essays on the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: KITLV Press, [Translation Series 26], 1996, pp. 113-115)。
- (3) Dumarçay, J., "Prambanan and Architecture", *Ancient History: Indonesian Heritage* Vol. 1, Singapore: Archipelago Press, 1996, p. 78
- (4) Anom, I. G. N., *Keterpaduan Aspek Teknis dan Aspek Keagamaan dalam Pendirian Candi Periode Jawa Tengah (Studi Kasus Candi Utama Sewu)*, Ph.D. thesis Universitas Gadjah Mada, Yogyakarta, 1996, pp. 353-371
- (5) 千原大五郎「中部ジャワのチャンディ建築史に対する一考察」『日本建築学会論文報告集』第221号、日本建築学会、1974, pp. 31-32; 同『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会、1975, pp. 99-103; 小野邦彦・河津優司「インドネシア、ジャワ島のチャンディ」『アジアの歴史的建造物の設計方法に関する実測調査研究』(文部省科学研究費・研究成果公開促進費採択刊行図書)第2篇、早稲田大学アジア建築研究室、1999, pp. 40-45, 51-52
- (6) Boechari, M., "An inscribed liṅga from Rambianak", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*,

Tome XLIX, Fasc. 2, Paris: École Française d'Extrême-Orient, 1959, p. 408

- (7) 岩本裕「インドネシアの仏教」『アジア仏教史・インド編VI, 東南アジアの仏教 - 伝統と戒律の教え』侠成出版社, 1973, pp. 289-290; 石井和子「ボロブドゥールと『初会金剛頂経』: シャイレンドラ朝密教受容の一考察」『東南アジア: 歴史と文化』, 1992, p. 5; 松長恵史『インドネシアの密教』法蔵館, 1999, p. 155などを参照。
- (8) 前掲書注(7) pp. 289-291
- (9) 石井氏は, 説法印如来を金剛界如来(釈迦牟尼・毘留遮那), 転法輪印如来を, 一切如来となって顕現した大毘留遮那と解釈している(前掲書注(7) p. 10)。松長氏は石井氏の説に同調しつつ, 説法印如来を釈迦牟尼, 転法輪印如来を毘留遮那と解釈している(前掲書注(7) pp. 155-156)。
- (10) 説法印如来及び転法輪印如来の各々を, クロム氏は毘留遮那及び金剛薩埵(Krom, N. J., *Barabudur: Archaeological Description*, Vol II, The Hague: Martinus Nijhoff, 1927, p. 158) 干潟氏は大日他受用法身, 大日自受用法身(干潟龍祥「中部ジャワの密教: ボロブドゥール大塔の意味するもの」『密教文化』71-72, 1970, p. 92) に比定している。
- (11) デュマルセは, ボロブドゥールの造営が大きく五期にわたってなされたものと解釈している(Dumarçay, J., avec la collaboration du Badan Pemugaran Candi Borobudur et de François GRENADE, *Histoires architecturale du Borobudur*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, [Mémoires Archéologiques 12] 1977)。
- (12) 例えば千原は, 六層の変形的ストゥーパとして企図されていた当初のボロブドゥールが, 設計変更を経た後に現状の十層(中心ストゥーパを含める) となった可能性に触れ, その変更を大乘仏教の六波羅密思想から十波羅密思想へと至る宗教思想の展開として解釈している(千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会, 1982, p. 144)。また一方でデュマルセは, ヒンドゥー教の遺構に顕著に認められる遠近法による錯覚的效果(実際よりも建築を高く見せる視覚的トリック) が, 仏跡ボロブドゥールにも採用されていることに言及した上で, 当初のボロブドゥールはヒンドゥー教の建築として構想されていた可能性について論じている(Dumarçay, J., *Candi Sewu dan arsitektur bangunan agama Buda di Jawa Tengah*, Jakarta: Puslit Arkenas, [Originally published in France, Paris: EFEO, 1981; translated by Winarsih Arifin dan Henri Chambert-Loir], 1986, pp. 39-40)。両者の解釈は, とともに推測の域を出ないものに留まるとはいえ, このような設計変更のあったことと, それに伴ってボロブドゥールに投影された宗教的意味が変化した可能性には留意が必要である。
- (13) 前掲書注(7) p. 168
- (14) 現状では, 東西に各二基と北に一基の計五基の存在が確認されるのみであるが, 寺苑の対称性に配慮すれば, 四方に各々二基ずつ配せられ, 図46に見るような配置をなしていたと考えられる。
- (15) これらの建築群を取り囲んで, 同心方形状に配せられた二重の圍繞壁(内側のものは約187 × 171m, 外側のものは約392 × 372m) の存在が確認されているが, 現在は部分的に礎石跡が残されるのみである。内側の圍繞壁の四方の中央には, 一對の守護神像を置く門が設けられていたと見られる。そして寺院の東方およそ300mの地点にチャンディ・アスウ, また南方およそ200mの地点にチャンディ・ブブラ, さらに北方およそ250mの地点にチャンディ・ロルの廃址が遺存しており, 今はほぼ消失した西方のチャンディ・クロンと併せて, セウの四方を守護する前衛寺院として機能していたとされる。また一方で, 二重の圍繞壁の間の寺域には, その東側に一基の小建築の礎石跡が発見されている(前掲書注(4)pp. 35-37)。
- (16) ブハリ氏及びクセン氏による同刻文のローマ字転写と訳文は, Anom, I. G. N. ed., *Candi Sewu: Sejarah dan Pemugarannya*, Yogyakarta: Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala, 1991-1992, pp. 93-

94b を参照のこと。

- (17) しかしこの刻文をチャンディ・セウに帰するに際して、少なくとも次の二点が説明されねばならない。まず、刻文が他所から運ばれた可能性はないのか？これについては、刻文が200kg余りもの重量を持つものである限り、当初の位置を大きく離れている可能性は低いといえる（前掲書注(16)p. 54）。第二に、なぜチャンディ・プルワラの階段脇といった一見して重要とは思われない場所に置かれていたのか？クセン氏によれば、本尊として祀られた文殊師利の像は、後に毘留遮那の像へと置き換えられた可能性があるとのことで、あるいはその当初において、件の刻文が主祠堂の入口脇などの重要な場所に置かれていたのだとしても、このような本尊の交替に伴って、文殊師利との関連を示す同刻文の重要度は薄れ、その結果プルワラの階段脇へ移されたことが想定されるという（前掲書注(16)p. 58, pp. 68-69）。本尊の交替を示唆する有力な根拠の一つは、本尊像を置く台座に、拡張された痕跡が認められることである（前掲書注(12) p. 19）。つまりその台座の拡張は、より大きな尊像へ置き換えるための措置であるとも考え得る（前掲書注(12) p. 29）。因みに、主祠堂の四方の房に安置されていた各像についても、当初は立像であったものが、後に座像へと置き換えられた形跡が認められるという（前掲書注(12) pp.29-30）。一方、セウの近傍からは青銅製の尊像の頭部が発見されているが、その大きさからして、かなりの像高を有する尊像の一部をなすものであったと推測され、またそれだけの像を収容する空間は、セウの中心内陣以外には考えられないとする指摘がある。そしてその螺髪を戴く頭部には、毘留遮那の特徴が観察されるという（前掲書注(2) p.82；前掲書注(12) p.29）。以上の諸論は、極めて興味深い視点を提供しているにしても、やはり推測に推測を重ねた感も否めない。しかしながらこれ以上の考察を進めるには、新たな考古学資料の発見を俟つ他はないのが実情である。
- (18) 同刻文のローマ字転写と訳文は、Bosch, F. D. K., “De inscriptie van Kěloerak”, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 68, pp. 18-22 を参照のこと。
- (19) 前掲書注(5) p. 205； Soekmono, R., “The archaeology of Central Java before 800 A.D.”, in R. B. Smith and W. Watson ed., *Early South East Asia; Essays in archaeology, history and historical geography*, New York, Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1979, p. 464； 前掲書注(16)pp. 57-58 など。
- (20) 中部ジャワにおけるシャイレンドラの支配が、史料によって裏付けられる八世紀中葉より以前に、その建立が着手されたとは考え難い。
- (21) Zoetmulder, P. J., *Old Javanese-English Dictionary*, Vol. II, 'S-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1982, p. 2313
- (22) 前掲書注(16)pp. 74-78； Chihara, D., *Hindu-Buddhist Architecture in Southeast Asia*, Leiden・New York・Köln: E. J. Brill, 1996, pp. 111-112
- (23) 前掲書注(22) p. 112 など。直方体の構造物の最上面は、そのまま中心内陣の床面と一致し、ちょうどそこに本尊像の台座が置かれることになる。クセン氏は、クルラク碑文に銘記された782年の時点で、直方体の構造物の上に台座と文殊師利像を載せた状態、つまり壁も屋根もなく、剥き出しの尊像を方壇の上に置いた状態で文殊師利が祀られていた可能性について論じている（前掲書注(16)pp. 78-67）。
- (24) 前掲書注(12) pp. 20-21, p. 24, 30
- (25) 前掲書注(12) p. 30。後に本文で詳述するが、主祠堂の周囲に配置されたチャンディ・プルワラでは数十体の如来像が確認されており、またそれらはその面する方位に応じて、各々金剛界の四方仏に比定し得る。従って、主祠堂の尊像群にしても、金剛界曼荼羅37尊との明確な対応関係を想定出来るかどうかはひとまず措くとして、金剛界四仏を基本軸に据えた尊像の配置がなされていた可能性は高いと言える（前掲書注(7) p. 160-161）。しかるに一方で、既述の

- ようにチャンディ・セウの中尊は文殊師利と推定され、それは「金剛界曼荼羅」の中尊である毘留遮那とは異なっている。そこで想起されるのは、法界語自在文殊の周囲を、金剛界四仏を基本軸とする諸尊が圍繞する「法界語自在曼荼羅」である（前掲書注(7) p. 161）。クセン氏は、注(17)に記した同氏の見解と併せて、チャンディ・セウの尊像構成に具現化された当初の曼荼羅は「法界語自在曼荼羅」であり、それが後に「金剛界曼荼羅」へ成り変わったものと推測している（前掲書注(16)pp. 69-71）。
- (26) 前掲書注(12) p. 29
- (27) 前掲書注(12) p. pp. 22-24, p. 30
- (28) その50体の尊像の尊名、発見位置、損傷の度合い等についてまとめた表は、前掲書注(16)pp. 155-158を参照のこと。
- (29) 例えば、内側から第三列目のチャンディ・プルワラの中で、中央主祠堂から見て東側にあるものでも、プルワラの面する方位は内向き、すなわち西方となるために、その内部には阿闍梨ではなく阿弥陀仏が安置される。つまり如来像の占地する場所が寺苑の東西南北のいずれの側かということが問題とされるのではなくて、尊像の面する方位に応じて、各々相応しい四仏が配当されることになるという（前掲書注(16)p. 70）。
- (30) 前掲書注(7) p. 168
- (31) ボロブドゥールとセウの尊像構成に見る共通性は、しばしば指摘されるところでもある（前掲書注(12) p. 29；前掲書注(7) p. 160など）。
- (32) 前掲書注(4)p. 355
- (33) チャンディ・ムンドウト（平面図は前掲書注(5) p. 173を参照のこと、以下の引用も同じく平面図が掲載された頁を指す）、チャンディ・カラサン（前掲書注(5) p. 191）、チャンディ・ソジワン（前掲書注(12) p. 137）、チャンディ・セウの主祠堂（前掲書注(12) のPl. XLIX YG 26）及びプルワラ（前掲書注(12) p. 104, 108, 118）、チャンディ・ルンブンのプルワラ（前掲書注(12) p. 133）、チャンディ・プラオサン・ロルの主祠堂（前掲書注(12) p. 143）など、現存する仏教遺構の場合まず例外なく、内陣の奥に寄せて尊像の安置されることが確認される。
- (34) インドのヒンドゥー教寺院の設計方法などを記した文献の幾つかには、内陣（ガルバグリーハ）に安置すべきリングヤ神像の「ずらし」に関する記述が認められる（小倉泰「ガルバ・グリーハの『ずらし』とマルマン：ヒンドゥー寺院の設計に関する新たな解釈」『今西順吉博士還暦記念論集：インド思想と仏教文化』、1996, p. 123-139）。ここでいう「ずらし」が、内陣の中心軸からの「ずらし」なのか、あるいは主祠堂の中心軸からの「ずらし」なのかという問題には検討の余地が残されているようであるが（前掲書、小倉, pp. 134-135）、いずれにしても、中軸線を避けてリングヤ神像を置くことが理論付けられていることは興味深い。そしてこうした「ずらし」を設ける意図について、これはいずれの文献も黙して語らないのであるが、やはりヴァーストゥ・プルシャ・マンダラにおける急所を避ける観念との係わりで説明されるのが妥当と思われる（前掲書、小倉 pp. 135-138）。もっとも、南インドの文献の一つである『マヤマタ』の記述から概算されるリングヤ神像の「ずらし」幅は極めて微少であり、もし現実にこうした「ずらし」が行われていたとしても、恐らくは視認することすら覚束ないはずである（前掲書、小倉 pp. 131-132）。別言すれば、内陣のほぼ中心にリングヤ神像が位置するように見える場合でも、実際には微少ながら意図的にずらされている可能性は否定し得ない。そもそも、内陣といった狭小空間にあって、中心に置かれるはずのものが若干ずらされるというのであれば、基本的には上記のようなものになってしかるべきである。ところがジャワの仏教祠堂では、既述のように本尊像は内陣の奥に寄せて安置されている。中心をわずかに外すという意図をそこに読み取るには、やはり若干の無理があるといわねばならない。
- (35) チャンディ・セウの主祠堂にしても、寸分の狂いもなく伽藍の中心に置かれているという訳

ではない。もっとも、現実的な施工のプロセスを想像するならば、大規模な伽藍の造営に際し、ある程度の施工誤差が生じる余地は当然ながら考慮されるべきであろうし、また地盤の不等沈下に伴う建造物の位置のずれ、そしてそれを矯正する際に生じ得る修復時の誤差、さらには測量誤差等も念頭に置かねばならない。が一方で、前注で述べたリングの「ずらし」から連想されるように、幾ラセウの主祠堂がほぼ伽藍の中央にあるからといって、意図的な「ずらし」がないと断言することも困難である。ただし、狭い内陣における安置物の「ずらし」と、広大な寺苑における祠堂の「ずらし」とを同レベルに考えるのはやや無理があるのではなかろうか。現に、大規模遺構に類別されるチャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍を見ると、その祠堂のずらし幅はおよそ 2m36cm にも及んでいるのである。ここで仮に、チャンディ・セウにも何らかの形で祠堂の「ずらし」があった可能性を認めたとしても、それはヒンドゥー教の諸遺構におけるような、明確な意図の下に行われた「ずらし」とは性質を異にすると見るべきである。

- (36) 当初のプルワラは、基壇に昇る階段に加え、入り口の扉も持たないものとして構想されていた可能性が指摘されている（前掲書注(12) p. 35）。
- (37) Casparis, J. G. de, *Short inscriptions from Tjandi Plaosan Lor*, Djakarta: Dinas Purbakala, [Bulletin of the Archaeological Service of Indonesia 4.]1958, p. 33; Kusen, “Parit Keliling Candi Plaosan”, *Iib. Aspek Sosial-Budaya*, Djakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional[Proyek Penelitian Purbakala Jakarta, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan] 1958, pp. 407-408
- (38) プラオサン・ロル及びプラオサン・キドゥルの周囲には、水を湛えた壕が巡らされていた可能性を指摘する報告もある（前掲書注(37) p. 397-412）。
- (39) 前掲書注(12) p. 36
- (40) Verbeek, R. D. M., *Inventaris der Hindoe-oudheden op den grondslag van Dr. R. D. M. Verbeek's Oudheden van Java*, in: *Rapporten van den Oudheidkundigen Dienst in Nederlandsch-Indië* 1915, Batavia: Albrecht, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1918, p. 75
- (41) 諸像の尊名比定については、前掲書注(7) pp. 163-167 を参照のこと。
- (42) ムンドウットの図像学的特徴は、前掲書注(7) pp. 53-128 に詳しい。